

来町のせし



# 奥多摩

《第58号》

令和2年(20)7月15日

(一社)奥多摩観光協会



吉野街道 (4月26日)

鷹ノ巣山下見 (6月11日)

ヤマユリ ユリの王様「荘厳」

## 「うつらない」「うつさない」活動再開

奥多摩の自然に魅せられて来町される皆様、「奥多摩友の会」の皆様お元気ですか。お元気でお過ごしであることを願っています。

4月7日、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う「緊急事態宣言」が東京を含む7都府県に発令され、同16日に対象が全国に拡大されました。そして5月25日にこの宣言は解除されました。これを受けて町は「奥多摩町新型コロナウイルス感染症対策本部会議」において、「都内からの来町自粛」を解除し、町の観光施設においても感染防止対策を強化した上で入場制限等を行いながら、順次再開することにしました。続いて6月19日に都道府県をまたぐ移動の自粛が全面解除された結果、東京都以外の他県からの来町も可能となりました。

しかし、この新型コロナウイルス感染症との戦いは、ワクチンの開発、治療法の確立等の取り組みが進められているものの予測が困難で長期戦が予想されます。感染症防止と社会経済活動の両立を図るためには、バランスを取りながら柔軟な対応策が求められています。

奥多摩観光協会では緊急事態宣言が解除されたことを受け、6月以降のイベント実施を開始することを決定し、6月8日の「大岳山」から再開しました。新型コロナウイルス感染症への安全対策を第一に考えて、当日を含めて3日間の体温の記録の提出、マスクの着用、非接触体温計による体温測定、消毒液の利用、行動中の2メートル間隔の維持、密になりやすい休憩時や昼食時に対面を避けることや手と手が触れ合わない距離の維持、食べ物の授受の自粛を履行すること等、今までとは全く異なる「感染しない」「感染させない」新たな意識をガイド・参加者共に共有し行動して参りたいと思います。

東京は日本で最も過密な都市であり、奥多摩は1400万都市の奥座敷ともいわれ多くの人々はその豊かな自然に癒しを求めて来町します。家族連れや若者、高齢者など老若男女を問わず幅広い層の人々にレクリエーションの機会を提供しています。奥多摩が憩いの場所であり続けることができるように皆様のご協力をお願いいたします。

奥多摩観光協会事務局長 井上永一

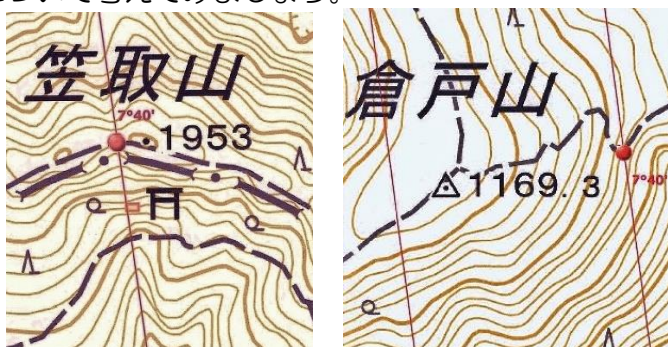
# 奥多摩山歩きワンポイントアドバイス ～危険箇所の通過と補助ロープ～

登山シーズンの幕開けが、今年は諸般の事情から大幅に遅れ、やっと緒に就いたかのようです。

例年に例えれば、啓蟄の頃の私たちのように長い冬眠から覚めたばかりで、しばらくは徐行しながら安全運転に努めたいものです。

山の斜面につけられた登山道には、基本的に滑落や転落の危険が潜んでおり、勘が戻っていない今年には特に細心の注意を払いたいものです。

今号では奥多摩友の会の皆さんと毎年登っている次の二箇所を例に、より安全に通過するための方策について考えてみましょう。



## I. 笠取山山頂付近の岩場

この山の頂上付近にある山梨百名山の標識と三角点のある山頂標識の中間点付近(図の丸印の位置)には、約60cmの段差があります。この場所の通過には湿気の多い時期など特に危険を伴います。直接の手掛かりが無いので、1.5m程上部にある樹木の株に細引きかテープスリングを設置して、これを手掛かりとすれば、初心者でもより安全に通過できるはずです。

## II. 倉戸山東面山頂直下の急斜面

山頂から東に標高差で70m程下った急カーブの地点(図の丸印の位置)から、左斜めに約20mの区間は、粘土質で滑り易くまた登山者の多くが転落の危険を感じる場所ではないでしょうか。わずかのスリップでも下が見通せない急斜面だけに、転落事故に繋がりがねませんね。

こうした場所を多数の初心者と共に通過するにはフィックスロープの設置など安全を確保する対策が必要となります。集団登山のガイドまたは引率者として、少なくともそうした技術に習熟しておきたいものです。

一方この場所付近をよくみると幸いにも等高線の間隔に大きい部分があります。40m程引き返して

比較的緩斜面をゆっくり下るのも、滑落の危険が少なく、登山道ではないがより安全に通過できる方法でしょう。

## III. ガイドの装備と安全対策入門

ここでは、笠取山の危険箇所通過にあると役立つ細引きとテープスリングについて取り上げてみましょう。

次の写真は左が上から、w=7mm×1.2m細幅スリング、Φ=6mm×5mとΦ=7mm×2mの細引き、また、右側の写真は上からw=20mm×1.6m、w=19mm×1.2m、w=20mm×60cmのテープスリングです。



このうち細引きを次の写真のように、ダブルフィッシャーマンズノットでリング状に結んでおけば、笠取山の岩場など歩幅以上の段差があっても、テープスリングと同様、上部にある安定した木の株にガースヒッチで結び付ければ、自己の体重の引き上げが容易となり安全に通過できます。



ダブルフィッシャーマンズノット

ガースヒッチ

ガースヒッチ結びは設置が簡単で、撤収も容易なため、行動中いろいろの場面で活用できます。

次回への予告として、左からもよい結び、マスト結び、半マスト結びを挙げておきます。



## まとめ

フィックスロープの設置など高度なテクニックもまずは自身の安全確保(ビレイ)を確実にしてから取り組むのが賢明で、ロープワークの裏には常に二重遭難の危険が随所に隠れていることに留意したいものです。  
(富士 光男)

## とっておきの山里歩きガイド

### 「奥多摩湖畔の道」を歩く その1

#### 浄光院を訪ねて 山里歩き絵図No.21「川野」

浄光院は、湖畔に面した川野岬の突端にあり、寺の様相を呈していますが、川野地区の生活館を兼ねています。臨済宗建長寺派の寺院で境内には、ダム建設に伴い移設された馬頭観音や庚申塔など、数多くの石造物があります。

奥多摩自然文化百選No.30にも選ばれるほど山の緑と奥多摩湖の水面が美しいポイントです。

山門や堂塔などはありませんが、入口の門柱に目にとまります。左に「金剛場」、右に「河北履」と深彫りの文字が印象的です。



意味はよく分かりませんが、禅寺なので厳しい修行の場という意味でしょうか。ちなみに浄光院の山号は、金剛山です。河北とは、寺の立地が多摩川の北、即ち河北としたのだと思います。

ここでは、境内の石造物をいくつか選んで紹介しておきます。実際にご覧いただき造立者の思いやそれを守り信仰してきた人々のくらしを辿ってみませんか。

#### 庚申塔



川野村には、小河内衆の頭領杉田入道重長の館があり、文化度の高い地域だったと考えられます。

近隣にない秀作の青面金剛像庚申塔をはじめ、道祖神、念佛供養塔、数多くの馬頭観音などを見ることができます。

#### 閻魔大王

石像の閻魔様とは珍しく貴重なものです。木彫仏の場合、脇侍として左右にお供が付き添いますが、造立時から単独かどうかは分かりません。ちなみに、古里の丹叟院の阿弥陀堂内には、木彫の阿弥陀さまが二人の脇侍を従えています。（今年は11月3日が公開日）



#### ロープウェイの鉄塔

ここで、浄光院周辺歩きで出逢う風景をいくつかご紹介します。

昭和37年～41年に湖面を渡る奥多摩湖ロープウェイがありましたが、今は、その鉄塔が面影を残すのみ。

#### 木の間越しに見る香蘭橋



伝説「おつねの泣き坂」に登場する若い修行僧・香蘭の名前を付けた香蘭橋が対岸に見えます。

#### 奥多摩は、石垣の風景がよく似合う



本堂の裏手に見事な石垣があります。（岡崎 学）

## 奥多摩樹木雑話

～ 夏の木の花二題 ～

森の緑が深みを湛える季節、森に沿って歩をすめると目にとまるのが、林縁の繁みから円錐状の白い花序を突き出しているノリウツギ、低木からみついて小さな花をびっしりつけたボタンツル。そのいずれもが、まわりの濃い緑と鮮やかなコントラストをかもし出しています。

春には黄色の花、夏には白い花が目につくというお話を聞くことがありますので、春と夏の花の色の割合を調べてみました。黄色系は春が30%夏が6%と春がかなり多く、白色系は春が42%夏は84%となりました。春の黄は待ちこがれた花への思いの発露、夏の白は緑との競合から来たものでしょう。ところで花に集まる昆虫と花の色との関係を調べた

ところ、「昆虫は太陽からくる紫外線を見ることができ（ヒトは見ることができません）何色の花でも（傍点は筆者）、まわりの花びらは紫外線を反射して明る

く、花の中心には紫外線を吸収して暗い模様として昆虫には見えています。花の中心には蜜があるので、そこに向かって昆虫は集まるので、この暗い模様は蜜標（ネクター・ガイド）といわれています」とありました。

コロナ・ウイルスで自宅に籠っているときに、寺田寅彦の「自然はいくら近づいて見ても、その美しさを失うことはない」という言葉にふれました。同じ状態でつれづれなるがままに、植物図鑑をめくっていて目に止まったのが、ツルアジサイの花でした。白い装飾花に囲まれた両性花に近づいて（拡大して）見たそのつくりの妖しい美しさにひかれて画いたのがカットの図です。花卉、がく片を落とした両性花を真横から見た図です。（花卉、がく片は自然に落ちます）

ツルアジサイは森の樹木からみつぎ、6月から7月白い花を薄暗い雰囲気の中で点灯させています。（橋上 一彦）

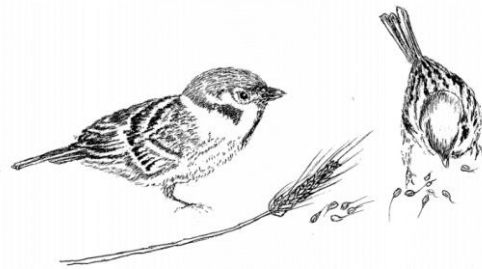
※今回は新型コロナウイルスの影響により4ページでのお届けです。

## 奥多摩の野鳥

～ 人間の生活圏を利用する鳥 スズメ ～

スズメ目 ハタオリドリ科、全長 14.5 cm

留鳥、漂鳥 頭上には茶褐色、喉は黒い、耳羽に黒斑がある。鳴き声は チュンチュン



今回は野鳥に興味のある人もない人もよくご存じのスズメを

取り上げました。 絵 大澤新次

スズメは人間の生活圏で生活している野鳥で（それ以外では生活していない）私達は案外知らない事が多くあります。

スズメは屋根、倉庫、ガレージなど町中にあるさまざまなすき間を巣に利用します。奥行があって入口が小さい場所がスズメにとって安全であり、体の大きい、カラスやタカ類が巣の中へ入ることが出来ないからです。スズメは大の風呂好きで、池や川、水溜まりなどで水浴び、砂浴びをします。これは羽毛や皮膚の汚れを落とし、寄生虫を取り除くためです。鳥がよく地面をつついて砂を口にしている事があります。スズメは歯がないので種などは丸のみにし、その消化を助けるために胃で砂や小石を利用しているのです。3～4月に卵を生み子育てをします。外敵から守るため、小さい鳥は出来るだけ早く巣立ちます。（2週間程）植物の実などを餌にしますが子育ての時は栄養価の高い青虫などの昆虫を餌にします。野鳥の平均寿命は大きい鳥ほど長生きでワシ、タカ類やオウム、ダチョウなどは50～60年。一方スズメなどの弱者は2年程度です。弱者であるがゆえの子育ての工夫は、天敵のタカ類の巣の下側のすき間の中に巣を作りタカを味方につけ足元にスズメの巣がある事を気づかせず、他の捕食者はタカが恐くて近寄れません。ところで最近、スズメの群れを見る機会が少なくなったような気がします。いろいろな理由が考えられますが、人間の歴史とともに歩んで来たスズメをあたたかく見守ってやりたいと思います。（畑 幸夫）

次回発行予定 令和2年10月15日

発行 一般社団法人 奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町氷川210

電話 0428-83-2152 FAX 0428-83-2789

編集 名人・達人観光ガイドの会